

シリーズ「肺がん」③

薬物療法について入院から外来治療へ

独立行政法人国立病院機構 和歌山病院

看護部 西川 貴子

最新のがん統計では、2015年のがんで死亡した人を部位別で見ると肺がんが1位となっていて、がんは3位で罹患率も高いがんです。ご存じの方も多いと思いますが、最近では、歌舞伎の申村獅童さんが肺腺がんを公表しています。

がんの標準的な治療には、手術、放射線治療、薬物治療の3つがあります。薬物治療は薬でがん細胞が増えるのを抑えたり、がんの成長を遅らせたり、転移や再発を防いだりする治療です。薬物治療は、世間一般に抗がん剤治療といわれているものがそれにあたります。抗がん剤以外に現在、開発著しい、分子標的治療や免疫療法も薬物療法です。治療は点滴で行われることが多いですが、最近では内服薬も増えてきています。

近年、薬物治療は治療が期待できる、余命延長に繋がる、生活の質の維持や改善する等、治療に対する期待も大きくなっています。しかしその半面、薬の影響で身体に何

らかの変化をきたす、いわゆる副作用が起きやすい治療でもあります。抗がん剤による副作用で、最も不快で苦痛な悪心・嘔吐は、現在ではどのようにして起きるかわかっています。それにより、効果的に吐き気を抑える薬が開発され、症状はかなり軽減できるようになってきました。悪心、嘔吐を一例に挙げましたが、他の副作用についても薬剤で症状の軽減や緩和ができるようになってきています。

こういったことが要因の一つにあり、近年ではがん治療が入院治療から外来通院治療へと治療の場所が変化し、当院でも外来化学療法室で治療を受ける患者さんが年々増加しています。そこで、当院の外来通院治療についてご紹介いたします。

外来化学療法室には専任の看護師が常在し、安全に治療が終了できるよう、点滴の管理や副作用の観察を行っています。部屋は個室でリクライニングチェアとテレビを設け、トイレを備え、静かで落

ち着いた雰囲気の中で治療を受けて頂ける環境を整えています。また、情報提供用にDVDやパンフレットを備え、それらを使いながら薬の副作用やその対応を、看護師が患者さん一人一人に説明し相談にも応じています。他に、副作用で脱毛が起きた場合に使う帽子や医療用かつらの展示、爪に影響が起きた場合の保護用マニキュア等、化学療法室で実際に見て、触って、体験しイメージしていただくことで、副作用が起きた際、慌てることなく対処できるような情報提供を心掛けています。

外来通院治療は、治療前とほとんど変わらない日常生活が送れること、入院生活による精神的負担がかからないこと、状況によっては仕事や家事等続けることが可能という良い面がある一方で、通院時間や外来での待ち時間がかること、治療を終えて帰った後、自宅や職場で体調変化が起きないだろうかという不安をもたれることもあると思います。当院では、治療を終え帰られた患者さんに変化が起きた場合の対応と、緊急時の連絡先を記載した緊急連絡カードをお渡しし、昼夜問わず医師、看護師、事務担当が連携のもと、安心して外来で治療を受けていただけるようサポートしています。